

# 天台山をめぐる古文献逸文輯考

—唐代までを中心にして—

## 薄井俊二

### はじめに

唐の道士徐靈府の手になると見られる「天台山記」という文献がある。日本の国立国会図書館が所蔵する写本のみが伝存する、孤本ではないかと思われるものが<sup>〔1〕</sup>、唐代以前の山岳地誌・寺觀誌の類は、本文が残されているものが少なく、唐代の道教や仏教の状況を知る上でも貴重な資料であるといえよう。天台山に関しては、「天台山記」以外にもいくらかの専著が存在しているが、それらの多くは、名前のみが伝えられるか、零々とした断片のみが残されてゐるにすぎない。そのため、後世の引用などでも、書名の紛れや混同が少なからず起きている。

そこで本稿において、「天台山記」を研究するアプローチの一つとして、天台山を記述の対象としている古文献について、基礎的な検討を加えておくことにする。

天台山が鎮座する台州地域に関する典籍を扱つたものに、項元勛「台州經籍志」四十卷（一九一五年、浙江省立図書館鉛印）がある。各文献の検討にあたつて、まず「台州經籍志」（「台志」と略称）から関連する項目を引用し、次に逸文をあげ、最後に簡単な考察を加える。  
なお本稿中で、「」で示した部分は、原本では割注であつた箇所である。

### 一 徐靈符「天台山記」と神龜「天台山図」

本節では、先ず徐靈符の「天台山記」について概略を述べ、数条の逸文を残す神龜の「天台山図」を検討する。

#### ①徐靈符「天台山記」

○「台志」・卷十四 地理類山水之屬・天台山記一卷（直齋書錄解題・國史經籍志・絳雲樓書目・浙江通志・杭州藝文志・

〔静觀書舍藏書目〕唐天台道士徐靈府撰・黎庶昌刻入古逸叢書中

\*宋陳振孫『直齋書錄解題』卷八 地理類・天台山記一

卷 唐道士徐靈府撰 元和中人也（以下略）

\*明焦竑『國史經籍志』卷三 名山洞府・天台山記一卷

〔唐徐靈府〕

\*清錢謙益『絳雲樓書目』卷一 地誌類・台山靈異錄

〔唐天台道士徐靈府撰 天台山記一卷〕

○〔逸文〕・現存。本文は略。現存するテキストとしては、日本の国立国会図書館所蔵の写本（「国会蔵本」と略称）がある。同写本を模刻したものが、『古逸叢書』（一八八四年刊）所収本である。その『古逸叢書』所収本を更に翻刻したものに、陸心源『唐文拾遺』卷五十（一八八八年刊）所収本と『大正新脩大藏經』卷五十一（一九二七年刊）所収本がある。なお、①「天台山記」は、宋陳耆卿『嘉定赤城志』（一二三三刊）などに数条が引かれているが、おおむね右記写本と一致する。

○「考察」・撰者の徐靈府は、中唐の道士で、号は默希子。生没年は不詳だが、元和から会昌までの活動が確認できる。錢塘天目山の出身で、南嶽衡山で修行の道に入り、元和元年（八一五）に天台山に移る。以後「以修鍊自樂」

（『興地紀勝』）の生活を送ること十余年、武宗に招聘されるも遂に出仕せず、やがて寂化したという。「天台山記」の他に、『文子』の注釈書である『通玄真經註』十二巻が伝存する（『四部叢刊』三編等所収）。その他「玄鑑」五巻、「三洞要略」、「寒山子集序」があつたというが伝わらない。七言絶句が二首、『全唐詩』に収載されている。

「天台山記」の執筆は、本文末の記載によれば宝曆元年（八二五）のことである。本書の内容は、天台山金体のこと、天台山に点在する諸山や名勝、また道・仏に関わる施設や史跡、それらにまつわる逸話などである。当然のことながら道教に関わる記事が多いが、仏教関係のものを排除しているわけではなく、排仏的な色彩は乏しい。<sup>(3)</sup>

本書は、『古逸叢書』に収録されていることから分かるように、中国本土では南宋期あたりを境に散逸したようである。日本へ伝來した経緯は確定しがたいが、智証大師円珍が将来した「天台山小錄」なる典籍がある。これが伝存する「天台山記」の祖本にあたるものと考えられる。<sup>(4)</sup>

補1・「台山小錄」

○「台志」・卷十四 地理類山水之屬・台山小錄一卷〔天台縣志・最初堂書目作天台小錄不著名氏〕唐天台道士徐靈府撰

今佚

志』卷二十一 赤城山条

\* 宋尤袤『遂初堂書目』地理類・天台小錄

○〔逸文〕・なし

○〔考察〕・「台志」は①とは別の典籍であるとしているが、本書は①と同じものを指すと考えた方が妥当であろう。徐靈符の「天台山記」には、「天台山小錄」「徐靈符小錄」等複数の異称が存したようである。<sup>(5)</sup>また智証大師円珍の将来目録である「入唐求法總目録」等(『大正新脩大藏經』等所収)に「天台山小錄一卷」の記事がある。これも①「天台山記」の異称ではないかと思われる。

②神龜「天台山圖」

○「台志」・卷十四 地理類山水之屬・天台山記〔天台山方外志・浙江通志〕唐釋神龜撰今佚

○〔逸文〕・逸文は、aからhの八条を数える。

a 1 .. 神龜山圖又采浮圖氏説以爲閻浮震且國極東處或又號靈越:『嘉定赤城志』卷二十一 天台山条

2 .. 神龜山圖采浮圖氏説以爲閻浮震且國極東處又號靈越:『方輿勝覽』卷八 台州条

b 1 .. 神龜山圖亦以此(赤城:稿者補)爲台山南門石城山爲西門徐靈府小錄又以剡縣金庭觀爲北門云:『嘉定赤城

水從南巔懸注望之如曳布建標立物以爲之表識也:『文選・李善注』卷十一孫綽「遊天台山賦並序」

2 .. 天台山圖曰赤城山天台之道南門也:『輿地紀勝』卷十二 赤城山条

3 .. 神龜山圖云其山凌映桐柏絕頂睇滄海以其蒼蒼接漢故

4 .. 大概以赤城爲南門石城爲西門據神龜所記如此而徐靈府小錄又以剡縣金庭觀爲北門:『天台山志』天台山条

c 1 .. 按神龜山圖此台山腳也其上夷坦可三十頃中有三泉冬溫夏冽以其橫據縣東舊呼爲東橫側有古淨池云:『嘉定赤城志』卷二十一 覆船山条

d 1 .. 按神龜山圖謂爲台山之腳其上坦夷可三十頃中有三泉冬溫夏冽側有古淨池今蕪沒:『天台山方外志』卷二 東橫山条

d 1 .. 按神龜山圖其山凌映桐柏(神龜以桐柏在天台極東接寧海界即非司馬子微今置觀處)絕頂睇滄海以其蒼蒼接漢故名:『嘉定赤城志』卷二十一 蒼山条

2 .. 按神龜山圖其山凌映桐柏神龜以桐柏在天台極東接寧海界即非司馬子微今置觀處絕頂睇滄海以其蒼蒼接漢故名:『輿地紀勝』卷十二 蒼山条

名：『天台山方外志』卷二蒼山条

e 1 ..而神龜山圖又有益州定慧寺初無四絕之名姑存之：

『嘉定赤城志』卷二十一 五峯「舊志云號天下四絕之一」

条自注

f 1 ..神龜山圖云桐柏在天台極東寧海界上父老又傳梁王山

即古桐柏山（以下略）..『嘉定赤城志』卷二十一 桐柏

山条

g 1 ..神龜山圖云此嘗創建桐溪寺：『天台山方外志』卷二

九峯山条

h 1 ..神龜山圖云其山峭嶮折而中峯拔立孤秀舊傳王喬控

鶴于此又名鶴峰：『天台山方外志』卷二 折山条

○[考察] ..撰者の神龜（七一〇~七八八）は、浙江贊陽の

出身。開元二十六年（七三八）に得度。のち長安で活躍し

たが、至德・大曆間（七五六~七七九）には、幾度となく

登壇度戒し、江南佛教界の重鎮であった。越州の焦山に大

曆寺を創建するに至ったことから、唐越州焦山大曆寺神龜

とも称される。文人との往来も多く「集十卷」があつたと

いう。また道士興筠の反仏論に対し、「破倒翻迷論」三卷

を著して対抗するなど、筆力にも秀でていたようである。

「未遊天台、又纂地誌兩卷、並附於新論」（宋高僧伝、卷十

七）とあり、天台山に関する二巻の地誌があつたという。

明万暦の『天台山方外志』卷八高僧考では「嘗著天台山記。全本亡。今、赤城志並天台縣志等書、指神龜山記者、特少小耳」という。これによれば、万暦年間ごろには既に散逸していたようである。また同書では、書名を「天台山記」とする（「台志」はこの記事に基づき、本書を「天台山記」と称しているのである）が、同じ『天台山方外志』の「石室藏書」（卷七台教考所収）では、志部として「山記（唐僧神龜著）」とする。一方、『嘉定赤城志』や『天台山方外志』においても、本書を引用する際には「神龜山図」の名をあげている。これは、神龜に「天台山記（あるいは「山記」）」と「山図」という二種類の著述があつたことを示すのではなく、彼に天台山に関する地誌の著述があり、それが「天台山記（山記）」や「天台山図（山図）」等の複数の呼称を持っていたと考える方が妥当ではなかろうか。なお『天台山方外志』に「亡」とあるからには、當時原本は存在しなかつたことになる。右記の逸文中、gとhの逸文については、今のところ『天台山方外志』よりさかのばる資料を見いだせないのである。あるいは同書のいう「天台縣志」からの引用であろうか。万暦以前に存した「天台縣志」としては、「宣德天台縣志」の存在が考えられる（台志）卷十三には、「千頃堂書目」明天台杜鵑修、寧李宗謐、

宣德丁未（一四二九年）廷試第二。歷官至兵部侍郎。書佚」とある。

あるいはこれから引用かもしれない。

本書が日本に将来された形跡はない。しかし、最澄の将来目録の一つである「伝教大師将来越州錄」（大唐貞元二十一年（八〇五）序）には「唐佛臥故荆溪大師讚一卷（會稽神龜述）」があり、神龜の文章が伝來したことを探る。

補2：「天台山圖」

○「古志」：卷十四 地理類山水之屬：天台山圖一卷〔遂初堂書目〕不詳撰人名氏今佚

\* 〔遂初堂書目〕 地理類：天台山圖

○〔逸文〕：なし

○「考察」：「台志」は、②の書名を「天台山記」とし、「天台山圖」なる典籍を別にあげて、撰者不詳とする。しかし、②の「考察」で述べたように、神龜の地誌は「天台山記」とも、「天台山圖」とも称されていたのではないか。そうであれば、「遂初堂書目」にいう「天台山圖」は、②を指しているものと考えられ、補2は②と同じものということになる。

（ア）断片が伝わるもの

③支遁「天台山銘序」

○「古志」：卷十四 地理類山水之屬：天台山銘序〔隋書經籍志考證〕：晉天台釋支遁撰今佚

\* 清章宗源「隋書經籍志考證」は、左記の逸文を紹介するのみ。

○〔逸文〕

a 1：支遁天台山銘序曰余覽內經山記云剡縣東南有天台山：『文選・李善注』卷十一 孫綽「遊天台山賦並序」

b 1：支遁天台山銘序曰往天台當由赤城山爲道徑：『文選・李善注』卷十一 孫綽「遊天台山賦並序」

○「考察」：支遁（三一四～三六六）は、字が道林、陳留の人。東晉を代表する学僧であるが、「遊天台山賦」の作者である孫綽などとも交流があり、老莊思想への造詣も深かつたといわれる。『新唐書・芸文志』などに「支遁集十卷」の記録があるが、今は伝わらない。

本節では、ごくわずかの断片が伝わるものと、書名のみが伝わるものを探る。

## 二 他の古文献

「天台山銘序」は本文も逸しており、支遁が同名の文章を記した記録もない。

④「旧圖經」(①「天台山記」所引)

○[台志]・記事なし

○[逸文]

a 1 .. 舊圖經云吳主孫權為葛仙公所創竄居形勝北松王真君

壇東北連丹霞洞西北拋翠屏疇

①「天台山記」(国会蔵本四丁裏)

本四丁裏

○[考察].. ①「天台山記」に「舊圖經」として、吳主孫權と葛仙公に関わる記事一条を引く。本書の引用がどこまで

なのが確定しがたい。後半の、王真君壇や丹霞洞の記事は、あるいは「天台山記」の地の文かもしれないが、一応右記までを掲げておく。

本書の書誌等は未詳である。「旧」というからには「新」

が登場して後の呼称であろう。あるいは②神龜「天台山圖」と関わりがあるのかもしれない。なお「輿地紀勝」卷十二台州碑記には、「舊圖經 教授余喜轄編」とある。

○[逸文]

⑤「圖經」(①「天台山記」所引)

○[台志]・記事なし

○[逸文]

a 1 .. 圖經云白雲先生從靈墟至華頂兩處從來朝謁不絕其上

造天尊堂并左右二室開寶以延日月朝食其光鑿龍以貯雲霧

夕吸其氣堂前立壇三級堂內有石像石磬上有鐵香爐并鍾此

壇久為荒榛近亦修開也

①「天台山記」(国会蔵本十七丁表・裏)

表・裏

○[考察].. ①「天台山記」には、「圖經」の呼称による引用も一条存する。司馬承債の逸事を述べるもので、これもどこまでが引用であるのか確定しがたい。あるいは④「旧圖經」と同じ書物かもしれないが、これも未詳である。

⑥「本起伝」「本伝」(①「天台山記」所引)

○[台志]・記事なし

○[逸文]

a 1 .. 仙公真經並義注之所也事迹具在本起傳中此不備載..

①「天台山記」(国会蔵本九丁裏)

b 1 .. 古之刻人劉晨阮肇入山遇仙於此其事亦具在本傳..

「天台山記」(国会蔵本一九丁表)

○[考察].. ①「天台山記」には、「本起伝」及び「本伝」と称する文献が記載されている。a 1 では、桐柏觀に関連して、もと葛仙公が道教的な著述をなした場所であること

を述べ、「詳しく述べは「本起伝」に記載されているので、ここで省略する」とある。b-1では、劉晏と阮肇が仙人に遭遇した話を述べ、「詳しく述べは「本伝」に記載されている」とある。いずれも天台山に関する文章であるように思われるが、具体的にどのような資料であったのかは未詳である。

⑦「天台山記」(李嶠雜詠・張庭芳注)所引

○[台志]・記事なし

○[逸文]

a-1・天台山記曰天台山瀑布飛泉下一道如帶：「李嶠雜詠

一百二十首　張庭芳注」(新美寛編「本邦殘存典籍による輯佚資料集成」(一九六八、京都大学人文科学研究所)によ

る。同書は「内藤湖南博士藏旧鈔転写本」(現関西大学内藤文庫蔵、幕末の写本)を元としている。

2・天台山語曰天台山上瀑布水泉下一道如帶：「一百二十詠詩註　唐李嶠撰　唐張庭芳注」(尊經閣文庫蔵本) (斯道文庫にマイクロ本として蔵、室町期の写本)より。)

○[考察]・日本に写本として伝わっている「李嶠雜詠・張庭芳注」に「天台山記」よりの引用が一条ある。①とは重ならず、これまで見てきた②以下の文献との重複もない。

神田喜一郎氏の研究によれば、張庭芳注は天宝六年(七四七)の成立であるが、現行本には後世の竄入がかなり含まれているといふ。仮に右記の引用が竄入部分ではなく本来から存したものであるならば、⑦は天宝六年以前に書かれたものであり、①よりもかなり先行するものであることがなる。なおa-2の「天台山語」は「天台山記」の誤記である。

⑧「天台記」(太平御覽)・事類賦注)所引

○[台志]・記事なし

○[逸文]

a-1・天台記曰丹丘出大茗服之生羽翼：「太平御覽」卷八

六七　茗条

2・天台記曰丹丘出大茗服之生羽翼：「事類賦注」卷十

七　服丹丘而翼生条

○[考察]・「太平御覽」(九七七刊)及び「事類賦注」(九三三刊)に、「天台記」よりの引用が各一条ある。これも①とは重ならず、②以下の文献との重複も見られない。

補4・「祥符図經」「祥符舊志」「祥符天台志」  
○[台志]・卷十三　地理類都會郡縣之屬・祥符天台志(天

台縣志》不知撰人名氏今佚

○〔逸文〕・未詳。

○〔考察〕・以下、宋代のものを二点あげておく。先ず「祥符」の年号を冠する文献を見る。次項にあげる宋之瑞「嘉泰天台山図」の自序に、彼が「祥符図經」なる文献を参照したという記事がある。書名に冠されている「祥符」とは、北宋真宗の年号である「大中祥符」(1008-1016)を指している。これは之瑞が「天台山図」を著した嘉泰二年(1202)からおよそ二百年前にあたり、自序中の「距今垂二百年」という記事とも符合する。大中祥符期に、天台山に関する専著が書かれ、少なくとも南宋の嘉泰年間頃まで伝存していたこと、またその文献が「祥符」なる言葉を書名に含んでいたことは、間違いないだろう。

あるいは「輿地紀勝」にいう「舊圖經〔教授余喜編〕」がこれにあたるかもしれない。また、「天台山方外志」(石室藏書)には「祥符舊志〔不知修者姓氏。圖經所引。今亡〕」とある。これが「符祥図經」を指すのであれば、本書は明代には既に散逸していたことになる。書名としても、「祥符旧志」という異称が存したことになる。「台志」で「祥符天台志」としているものも、これにあたるのではない。

補5・宋之瑞「嘉泰天台山図」五卷

○〔台志〕・卷十三 地理類都會郡縣之屬・嘉泰天台圖經五卷〔遂初堂書目・天台縣志・浙江通志・三台詩錄・光緒台州府志・世善堂書目作三卷〕宋天台宋之瑞撰有自序及邑令丁大榮序今佚

\*「遂初堂書目」地理類・天台圖經

\*明陳第「世善堂藏書目錄」卷上 史類方州各志・天台圖經三卷〔宋之瑞〕

\*「天台山方外志」卷七台教考・石室藏書志部・天台圖經〔宋之瑞著〕

○〔逸文〕・「天台山方外志」卷十九に、宋之瑞の「自序」のみが引かれるほか、「台志」には、「丁士榮序」を載せる。その他の本文部分は未詳。序文はここでは略す。

○〔考察〕・宋之瑞の自序によれば嘉泰二年(1202)八月の成書である。「曩歲、居憂多暇」の時、「二の釈子と高僧逸士之所棲隱、騒人墨客之所賦詠、斷碑殘刻、靈蹤異狀」を「窮探極詣」した。その後、およそ二百年前に書かれた「祥符圖經」を参したところ、「殊略」であった。そこで改めて、戸口・賦入・人材・区宇などを調べて、「門分彙次」して「廳成一編」したのが本書である。ただ

し「荒誕不經者、削去弗錄」という。

宋之瑞は天台の人、字は伯嘉。隆興元年（一一六三）の進士で、宗正秘書から経歴を始め、光祿大夫で致仕している（『嘉定赤城志』卷三十三）。本書の他に「仁真亭記」（嘉泰元年）が『天台山方外志』に収録されている。丁士栄については、慶元六年（一一〇〇）から嘉泰三年（一一〇三）の間、天台県令に就任していた記録がある（同前）。

（イ）書名のみが伝わるもの

⑨「南岳並天台山記」（最澄将来）

○「台志」・記事なし

○「台志」・記事なし

○「台志」・伝教大師最澄の将来目録である「伝教大師将来台州錄」（八〇五序）に「南岳並天台山記一卷」の記事がある。「五紙」とあり、大部のものではなかつたことが伺えるが、撰者や内容を伝える記事は他にはない。やがて散逸したようで、それ以後本書の所在を伝える記事はない。中國側の目録類でも、本書に類似する記録は見あたらぬ。

○「考察」：「天台山」の名を冠するものではないが、⑨との関連で一点の文献を検討しておく。

先ず、「伝教大師将来台州錄」に「南岳記一卷〔李龜撰〕」がある。「三紙」とあり、⑨よりも小ぶりである。

「日本國見在書目錄」には「南岳山記一卷」があるが、本書との関連は確定できない。

撰者の李龜なる人物としては、李善の父の李北海が有力であろう。李龜（字北海、六七五～七四七）は、『新唐書・文苑伝中』卷二百二に伝があり、『全唐文』卷二六二に五十六篇、『唐文拾遺』卷十六に八篇の文章が収録されている。後世の『李北海全書』等に収録されている伝記資料には、この李龜が「南岳記」なる文を著した記録はない。しかし彼は依頼されて碑文を数多く著したとされ、実際に「瑞州石室記」等の記や「嵩岳寺碑」「五臺山清涼寺碑」「國清寺碑」など、山岳と寺院に関する文章が多数残されている。また「國清寺碑」は「伝教大師台州将来錄」に引く「天台山國清寺碑一卷〔李龜撰〕七紙」にあたるものと推測され、李龜と本書との親近性を示唆するものとなつている。

補6：李龜「南岳記」（最澄将来）

○「台志」：記事なし

補7：「南嶽記」一卷

○〔台志〕・卷十四 地理類山水之屬〔佛祖統紀・天台山方外志・浙江通志・天台縣志〕隋臨海釋灌頂撰今佚

\* 〔天台山方外志〕卷七 台教考章安頃・南嶽記〔一卷

亡)

○〔逸文〕

a 1 .. 又章安山記云本稱南岳周靈王太子子晉居之魂爲其神命左右公改爲天台山也・唐釈湛然『止觀輔行傳弘決』卷一之一

○〔考察〕・灌頂（五六一～六三二）は、臨海郡章安の人。

天台宗の第二祖で、諡号は章安大師という。天台智顥に従つて江南各地を巡り、やがて天台山に入る。師の入寂後はその後を継ぎ、国清寺の創建に関わる。隋唐兩帝室とも繋がりを持つなど、天台宗の隆盛に力があつた。

『大般涅槃玄義』二卷（『大正新脩大藏經』卷三十八）・『大般涅槃經疏』三十三卷（同前）などの注釈書の他、始祖の伝記である『智者大師別伝』一卷や、国清寺の創建に関わる重要な書簡や規則などを集めた『國清百錄』四卷（同卷四十六）などの著述がある。「南嶽記」の撰述については、『仏祖統記』卷第七に記録がある。『天台山方外志』によれば、万曆ころには散逸していたようである。逸文として、「章安山記」の名で引かれる一文をあげて

おいた。おそらくこれが「南嶽記」の一節ではないかと思われる。

⑩「台山靈異錄」

○〔台志〕・卷十五 地理類雜記之屬・台山靈異錄〔絳雲樓書目〕唐天台道士徐靈府撰今未見

\* 〔絳雲樓書目〕卷一 地誌類・台山靈異錄〔唐天台道士徐靈府撰 天台山記一卷〕（①に既掲）

○〔逸文〕・未詳。

○〔考察〕・「絳雲樓書目」の述べるところは、今ひとつ明らかではない。「台山靈異錄」の撰者として徐靈府の名をあげ、さらに彼に「天台山記」なる著述があつたことを示そうとしているように読める。しかし、徐靈府に「台山靈異錄」なる著があつたという記録は、管見によれば、この「絳雲樓書目」以外には存しない。あるいは次の補8と同じ文献を指しているのかもしれない。

補8・「台山靈異錄」

○〔台志〕・卷十五 地理類雜記之屬・台山靈異錄〔讀書敏求記・述古堂藏書目・千頃堂書目・台州府志・浙江通志〕明天台龐櫟撰今未見

\*『天台山方外志』卷七 台教考・石室藏書志部・台山

靈異錄〔龐櫟輯〕

\*清錢曾『讀書敏求記』卷二 地理輿圖・台山靈異錄一

卷〔瓊臺山人龐櫟、輯古今靈異圖志二十餘事、編成此書〕

\*清錢曾『述古堂藏書目』卷三 名勝・台山靈異錄一卷

\*清黃虞『千頃堂書目』卷八 史部・龐櫟台山靈異錄一

卷〔號瓊臺山人〕

\*清錢曾『也是園藏書目』卷三 名勝・台山靈異錄一卷

○〔逸文〕・未詳。

○〔考察〕・本書も明代のものであるが、⑩との関係であげておく。清朝の書目類に名があがつていていることから、現存するものと思われるが、未見。

○〔逸文〕・未詳。

○〔考察〕・本書は未詳。

おわりに

以上、唐代までの天台山に関する十点の文献と、その周辺に関する八点の文献について検討した。最後に、元代以降の重要な文献を三点、補足しておく。

○〔考察〕・天台山方外志三十卷

○〔台志〕・卷十四 地理類山水之屬・天台山方外志三十卷  
〔千頃堂書目・明史藝文志・浙江通志・四庫全書總目・浙江采集遺書總錄・台州府志・天台縣志・台州書目・靜觀書舍藏書目〕明天台釋傳燈撰萬歷辛丑作凡十八門大抵釋家事爲多首有王孫熙虞淳熙屠隆顧起元序及自序光緒甲午釋敏曇重刊有韓殿爵張邁楊農序

○〔考察〕・天台山の專著として、現存するものでもつとも古いもの。『天台縣志』『天台山全志』などの、万曆以降の文献の記事は、この『天台山方外志』からの孫引きである。刊本が幾本があるが、光緒二十年の重刊本が『中國佛藏目錄・浙江通志・四庫全書總目・鐵琴銅劍樓書目・清學部圖

書館善本書目』元天台道士王中立撰今存

○〔考察〕・『正統道藏』(洞玄部記伝類・翰)所收。任繼愈

主編『道藏提要』(一九九一、中国社会科学出版社)は、至正二十七年(一三六七)の成書であろうとする。

寺志叢刊』第三輯（台灣丹青圖書公司、一九八五）に所収。

#### 注

（1）「天台山記」の本文は、国立国会図書館のウェブページ上に、「デジタル貴重書展・特別展示」として、全文の写真版が公開されている。当該のURLは次の通り。

○ <http://www.ndl.go.jp/exhibit/50/index.html>

（2）徐靈府の伝記や「天台山記」については、拙稿「唐道士徐靈府撰『天台山記』初探」（中国研究集刊）歳号（第二十九号）二〇〇一）を参照。

（3）明代の『國史經籍志』には「天台山記」の記事がある。しかしこの目録は、長沢規矩也氏が「存佚に論なく、考證を加へず、舊目著録の書名を擧げたれば、頗る無難なり」（支那書籍解題書目書誌之部）（もと昭和十五年刊、『長澤規矩也著作集』第九巻所収）と評するように、必ずしも現存書をあげたものではない。ここに書名が収載されることとは、その当時「天台山記」が現存していたという証拠にはならない。

（4）この点は、（2）前掲拙稿でも若干の検討をした。詳しい検討は別稿で行う予定である。なお、日本の釈慈本の増補による『天台霞標』二編卷之二（一八二九刊）に、智証大師円珍撰目拾遺として、「天台山記」一巻の記事を載せる（この記事は、釈慈堂編輯『山家祖德撰述篇目集』に再録さ

れている）。しかし、円珍が「天台山記」なる著述を残した記録は他ではなく、信憑性に乏しい。円珍が将来したことなどを、円珍が著述したと誤解しているのではないか。

（5）この点は、拙稿「徐靈府撰『天台山記』の研究（その一）—基礎研究並びに国立国会図書館蔵本の翻刻と校勘・訳注」（埼玉大学紀要（教育学部））第五十一卷 第一号、二〇〇二）を参照。

（6）b2「文選・李善注」及びb3「輿地紀勝」には「天台山圖」とのみあり、撰者名を明記しない。しかし、その内容は赤城山を天台の南門とする説を紹介するもので、b1「嘉定赤城志」とほぼ等しいと考えてよいのではないか。またb4の記事も、その説が釈神巣のものであることを指摘するものであり、b1等との関連性を伺わせる。

（7）神田喜一郎「『李嶠百詠』雜考」（「ビブリア」第一輯、一九四九）。

（8）室町時代のものとされる『大唐國法華宗章疏目録』（安禪頂大師章疏）に「南岳並天台山記一巻」、江戸初期の作とされる『釈教諸師製作目録』に「南岳天台山記一巻」、江戸の釈謙順による『諸宗章疏錄』（一七九〇刊）に「南嶽天台山記一巻〔按一本亦亡名〕」等とある（いずれも『大日本佛教全書』所収。成書年代等は、同書の「解題」（鈴木學術財團、昭和四十八）による）。しかしこれらの目録は、実物の現存を伝えるものではないようである。

（埼玉大学）